

《研究ノート》

「根源的連合」説と「統握」内容

図式——ブレンターノとフッサールの時間論——

村田 憲 郎

はじめに

晩年のフッサールが、言語的な統握作用 (Aufpassen) 以前の受動的な層の探求にますます沈潜していったことは知られている。そこでフッサールは、感性的な与件が能動的な意義付与作用以前に受動的な「連合 (Assoziation)」の働きによって構成され、秩序化されるさまを分析していく。「発生の現象学」を構想した。この発生の現象学を肯定的に捉えるのであれば、翻ってフッサールの初期時間論におけるブレンターノ批判は新たに検討し直されるべきであろう。というのもブレンターノの「根源的連合 (ursprüngliche Assoziation)」説との対決を通じて、フッ

サルは時間意識を、感覚的な内容を意識が「統握する」作用によって説明しようとしたのだが、のちには逆にこの「統握」内容」図式によって時間意識を説明することの困難が、発生の現象学の構想を促していったのだからである。つまり、ブレンターノの「根源的連合」説がすでに、フッサールの発生的な連合の現象学を先取りするものだったかもしれないのである。

とはいえ、フッサールが構想した発生の現象学は「超越論的発生」についての学であるから、単なる経験的な心理学的発生と同列に置くことはできない。つまりすでに構成された物理的・日常的な時間よりも以前のレベルで、発生を捉えなければならぬのである。この点に関して、フッサールがブレンターノの記述の心理学から距離をとったことは肯定的に捉えられるべきであろう。

こうした見通しのもとに、およそ一九〇四／〇五年までの時間草稿に見られる、フッサールのブレンターノとの対決を考察してみたい。実際、一九二八年に『哲学および現象学的研究年報』(Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung) に発表されたフッサールの『内的時間意識についての現象学講義』¹⁾は、主に彼の一九

○四／○五年の講義に由来するものであるが、この講義はブレントナーとの対決から始まっている。

両者の関係を提示するためには、発展的な理解が必要であるが、ここではとりわけフッサールの批判点である、

(1) 時間的変様は内容的な変化ではなく、統握性格の変様であるという点

(2) 作用の対象と統握される内容とを区別していないという点

の二点に絞って追跡してみよう。

1 時間的変様は内容的な変化ではなく、統握性格の変様であるという批判

1. 1 ブレントナーの「根源的連合」説

時間論の基本的な課題は、時間的な継起がいかにして構成されるかを説明することであるが、フッサールはこれを「把持」ないし「新鮮な想起」によって、彼の師ブレントナーは「根源的連合」によって説明しようとした。

フッサールの時間論の特色としてよく引き合いに出される、知覚作用においてすでに働いている、「たったいま」過ぎ去ったものを現在のうちに引きとどめておく「把持

(Retention)」という意識の働きについて、フッサールはもうすでに一九〇一年に言及している。ただしそこではこの働きは「新鮮な想起 (frische Erinnerung)」(X.153)と呼ばれている。

例えば「ド・レ・ミ……」というメロディーが聞こえてくるとしよう。ここで「ド」の次の「レ」が聞こえてくるとき、「ド」は完全に忘却されてしまったわけではなく、直前に過ぎ去った音として現在の「レ」とともに現在の意識のうちにとどまっておき、同じく「ミ」の音が聞こえてくるときには、「ド・レ」という一連の直前の音がたったいま過ぎ去ったものとして現在の意識のうちにとどまっている。このようにたったいま過ぎ去ったものを現にいま存在するものとともに現在の意識のうちに保持している働きを、フッサールは「把持」もしくは「新鮮な想起」と呼ぶのであり、この「把持」の働きのおかげで、一連のもろもろの音が単なる個々の音ではなく、一連の「メロディー」という複合体として知覚されるのである。

このような近接的過去についての意識を発見したことが、フッサールの時間論の新しさなのではない。彼の師ブレントナーもまた、メロディーや発話された語音、物体の運動

などの、継続的な複合的事象の知覚にとって本質的な、近接的過去の意識にすでに知っていた。それが「根源的連合 (ursprüngliche Assoziation)」の教説である。以下はブレンターノと関係の深かったシュトゥンプフによる、「根源的連合」の説明である。

「ある (内のおよび外的) 知覚のどの瞬間においても、表象が知覚内容によって産み出され、この知覚内容は質的には同じであるが、時間的にはある程度遠いものとなっている。彼にとっては時間を性格づけるものは、まさしく意識の法則にしたがって変様する内容の規定であった。彼はこのプロセスを記憶の「後天的な連合」に対立させて「根源的連合」と呼んだ。幾つかの印象 a、b、c、d が次々と継起していくとすれば、われわれは二番目の印象が現れるとき最初の印象が上述のような仕方の後退し、以下同様に進んでいくのを見る」。

つまりフッサールにとって「把持」がそうであるように、時間的継起を構成し現出させるのは、ブレンターノにとつては「根源的連合」(また彼はこれを先行感覚 (Protetas-

(3) Hese) とも呼んでいる) の働きなのである。

またブレンターノは明記していないが、マルティーによれば、この「たったいま」という規定を作り出す働きは「想像力の特種な働き」⁽⁴⁾である。「たったいまの音」は、「ペガサス」などの想像上の対象が実在しないと同様、もはや実在しない対象だからである。

さて、ブレンターノの「記述的心理学」の課題は、「人間の意識の諸要素とその結合の仕方」を(可能性にしたがって)くまなく規定すること」⁽⁵⁾(D.P.1)であった。このプログラムにしたがって、彼は意識をさまざまな部分ないし諸要素に分析し、諸要素間の関係を考察する。例えばは視覚的な「見る」と聴覚的な「聴く」とは、意識の諸部分であるが、各々他から独立に具体的に存立することができるので、互いに現実的に「切り離しうる (ablösbar)」部分である。他方「注意すること」は「見る」と「聴く」は成立しえないので、具体的には区別されえず、思考によってのみ抽象的に区別される「弁別的部分 (distinktoneller Teil)」である (D.P.12-20)。⁽⁶⁾

こうした問題設定から、「過ぎ去った音」の特殊性が顕

わになってくる。「過ぎ去った音」は「過ぎ去った」という部分と「音」という部分とに分析されるが、「過ぎ去った音」は、「大きな音」、「美しい音」などと比べて、実在しないという特殊性をもっている。つまり「大きな」「美しい」といった通常の属性が「音」の実在性を損なわないのに対して、「過ぎ去った」は「音」の実在性を奪う特殊な属性なのである。それはものの規定性を豊かにするような規定ではなく、「変様させる規定(modifizierende Bestimmung)」である(DP.19)⁽⁷⁾。この「変様させる規定」としての「たったいま過ぎ去った」という内容をどう考えるかが、ブレンターノの時間論の問題であった。

ではフッサールの第一点目の批判点から考察しよう。フッサールもまた上のシュトゥンプフと同様、ブレンターノの「根源的連合」による時間的変様を内容の変化と捉えている。

「ブレンターノによれば、「時間的後退」は本質的に内容変化のうちに存するという。ある「例外なき法則」にしたがって、「根源的連合」によって連続的に知覚表象に新たな諸表象が結びつき、これら諸表象のいずれも、先行する

ものの内容を再生しており、その際過去という(不断の)契機が付け加わる(…)。ブレンターノによれば表象するという作用性格は何らの差異化も許すものではないので、すべては内容変化へと遡及し、時間的変化とは単にまったく固有の内容変化でしかない」(X.17)。

まず「表象するという作用性格は何らの差異化も許すものではない」とはどういう意味なのかを、ブレンターノの判断論とそれに対するフッサールの『論理学研究』における批判を通じて明らかにしたい。

1. 2 ブレンターノの判断論と、『論理学研究』におけるフッサールの批判

ブレンターノは判断論において、あらゆる志向的体験を(1)表象(Vorstellen)／(2)判断(Urteil)／(3)情動(Gemütsbewegung)の三つに分類した(USE, 16-19, PES, II, 33-36)⁽⁸⁾。

(1)「赤」「音」「木」のように、文法上の名辞に相当する「表象」は、それ自身では判断性格をもっておらず、何らの主張も拒絶もしていない。さらにこうした名辞の幾つか

を組みあわせることによっても、判断は構成されない。例えば「緑の木」「黄金の山」「百人の子の父」「学問の愛好者」などは、単なる名辞の組み合わせであって、それ自身はまだ表象にとどまっている。ここにプレントナーが伝統的な判断論に対して自負する革新性がある。伝統的な判断論は判断の本質を表象の結合、あるいは表層相互間の関係とみなしてきたが、表象同士を結合し関係づけるだけでは判断は構成されないし、また逆にただ一つの表象しかもたない判断(例えば「神は存在する」)もまたありうる。

(2)そこで判断が表象から区別されるのは、「承認する(Anerkennen)あるいは拒絶・拒否する(Verwerfen, Leugnen)」といった表象への関係の仕方、態度によってである。つまり「神は存在する」という判断は、「神」という表象についての承認・肯定によって成立し、「神は存在しない」という判断は、この表象についての拒絶・否定によって成立するのである。

また同じく(3)情動も、ある表象に対する肯定的な欲求である愛、または否定的な欲求である憎しみという態度によって成立する(例えば「神が存在してほしい」という願望は、「神」という表象の対象に対する愛という態度に

よって構成されており、神がそれ自身として「善」であるならば、その愛は正しい態度である)。

こうして、「表象されないものは何ら欲求されない」(つまり情動は常に表象を基盤にもっている)のと同様、「表象されないものは何ら判断もまたされない」(PES. II, 39)のであり、あらゆる判断の根底には表象があることになる。フッサールが『論理学研究』第五研究でプレントナーの見解を「志向的体験はすべて、表象であるか、もしくは表象をその基盤としているかである」(XIX/1, 443)と要約しているとき、彼の念頭にあったのはこうした事情であった。

ところで『論理学研究』第五研究のフッサールの主要な問題の一つは、もっとも基礎的な志向的体験である表象が、本当にプレントナーの言うように作用性格をもたず、ただもっぱら内容的契機しかもたないものなのか、それゆえ表象どうしが区別されるとしたら、内容の相違によってしか区別されないのだろうか、という問いであった(XIX/1, 450f)。結論から言えば、フッサールはあらゆる志向的体験が「志向的本質」として、意義的実質をなす「質料(Materie)」と、作用性格としての「性質(Qualität)」との二つの契機をもっていると考えており(XIX/1, 431)、『そ

れゆえプレタターノの「表象」のような、作用性格を欠いた端的な内容のようなものは、抽象物としてしか認めない。

それゆえプレタターノが「表象」と言う場合、「表象」という語の多義性に注意すべきであり、それは「名辞的作用(nominaler Akt)」という狭い意味での表象作用を表す場合と、「客観化作用(objektifizierender Akt)」という広い意味での表象作用を表す場合とがある、とフッサールは指摘している(XIX/1, 498)。

前者の意味での表象とは、名辞に相当する作用、まなざしが単純に一つの対象に志向的に向かうような作用であり、これには文のかたちをもつ「命題的作用」が対立する。こうした区別は作用の意義的な「質料」の差異にもとづいている。一方はその質料が単純な作用であり、他方はその質料が複合的である。しかし「名辞的作用」は、プレタターノの「表象」のように、もっぱら内容的契機しかもたず、内容によってしか区別されないような作用ではなく、その内部でさらに「措定的作用」と「非措定的作用」との区別が可能である。例えば眼前にあるこの机についての「机！」という知覚は、この机を現に存在するものとして措定する作用であるが、同じ内容もち、かつそうした措

定的性格を与えない、単に机を思い浮かべるだけの「机」の表象もありうる。そして知覚と「単なる表象」とは、措定的あるいは非措定的という作用性質によって区別されるのである。

さらには同じ区別が「命題的作用」の内部でも可能である。「机がある！」という措定的命題と、「机がある、と彼は言った」の「机がある」とは、同じ意義的な質料をもっているが、前者は措定的であるのに対して、後者は判断を留保した非措定的な命題的作用でありうるのであり、そのときこの両者は共通の質料をもつが、作用性質によって区別されることになる。

つまりプレタターノの表象と判断との区別は、フッサールにとっては、名辞—命題という、意義的な質料に関わる区別と、措定的—非措定的という、作用性格に関わる区別との、本来別個に考えられるべき二つの区別が混同されたものであり、それゆえに曖昧なものになっていたのである。これに対して、名辞的—命題的、および措定的—非措定的という二つの区別にまたがるすべての作用を包括する、もっとも広い意味での表象をフッサールは、欲求・意志・価値評価などプレタターノが言う情動的な作用と対立させ

て「客観化作用」と呼んでいる。したがって「志向的体験はすべて、表象であるか、もしくは表象をその基盤としているかである」というブレンターノの命題も、名辞的作用が命題的作用を質的に基づけるという意味と、客観化作用が情動的作用を基づけるという意味との二通りに解釈されるような多義性をはらんでいたわけである (XIX/1, 519)。

1. 3 統握作用の所産としての時間性、「統握—内容」

図式

一九〇一年の時間草稿で言われていたことに立ち返ろう。「ブレンターノによれば、表象するという作用性格は何らの差異も許すものではない」(X, 171)。ブレンターノの判断論によれば、判断が承認することであるか拒絶することであるかという「作用性格」に応じて、少なくとも二つの判断に分類されるのに対して、表象は作用の内容によって区別されるだけである。つまり彼にしたがえば、「法王」の表象が「皇帝」の表象から区別されるのが、「法王」という内容と「皇帝」という内容との相違によってであるのと同様に、「いまの音」と「たったいまの音」との相違は、

「いまの音」という内容と「たったいまの音」という内容との相違にもとづくものでしかないことになってしまう。そしてフッサールは、「いま」「たったいま」といった時間的規定がそうした内容の相違にもとづくものではなく、「統握作用」の所産であると考えるのである。

「明らかなことと思われるのは、——いまに関係づけられる——「知覚」と、知覚に直接に結びつく直観的「想起」との関係は、新たな第一次的内容が去っては到来するといったことよって解明されるような関係としては把握されえないということである。われわれが十全に与えられる諸内容、したがって時間的諸対象として統覚されている諸内容に制限するならば、体験におけるいま存在するAとかつて存在したBとの間の区別は、Aに結びついている内容契機に伏在していることはありえない。……ところでいったい現象学的な区別はどこに存しているのだろうか。統握の仕方、意識の仕方においてであろうか」(X, 172-173)。

『論理学研究』におけるブレンターノ判断論の批判では、フッサールは「表象」が志向的な作用性格を欠いた単なる

内容的な契機ではなく、措定的、非措定的といった作用性格をもっている」と述べたのだが、時間論でも批判の同型性が見られる。彼は「いま」「たったいま」といった時間的区別も、「統握作用」における作用性格の相違とみなし、ブレントラーがそれを内容的相違としか考えていないことを批判しているのである。

統握作用とはさしあたり、例えば茂みの中の「がさごそ」という音を聴いて、それを「へび」として把握する場合や、また単なるアラベスク模様であったものが、突然ある意義をもつ文字として現れてくる場合⁽¹⁰⁾などのように、「……を……として統握する(…als…auffassen)」という作用である。「志向的対象への関係において表象(…)」と呼ばれるものが、作用に実的に属している諸感覚への関係においては統握、解釈(Deutung)、統覚(Apperzeption)などと呼ばれる」(XIX/1, 399)。また統握は、「統握質料」「統握形式」「統握される内容」の三契機からなる上で「質料」と言われていた作用の意義的な契機(上の例の「へび」や意義をもった文字など)が「統握質料」であり、それ以前に見いだされる意義を欠いた単なる感覚内容(「がさごそ」という音やアラベスク模様)が「統握される

内容」であり、そして上で「統握の仕方」と呼ばれているものが「統握形式」である。つまり「AをBとして統握する」と一般的に定式化すれば、Aが「統握される内容」であり、Bが「統握質料」である。

さて、時間的変様は内容的な契機のうちにはないとすれば、上のAの位置に「いま」「たったいま」といった時間規定を代入することはできない。そこには「ド」や「レ」といった端的な音のみが代入される。そうした内容的契機が統握を経て「いまの音」「たったいまの音」といった「統握質料」として構成されることになる。これがフッサールのいわゆる「統握—内容」図式なのである。

しかしここで幾つかの疑問が生じる。まず第一に、その明証性、不可謬性といった観点から見た場合、物音の正体が「へび」ではなく犬であった、あるいはその形象が数字の「8」と思ったら「B」であった、ということがありうる。統握の所産としての「統握質料」は決して明証的とは言えない。しかし「二〇〇一年の九月一日」とか「三ヶ月前のあの日」、「二五分钟前からずっと」といった規定であればそうした誤りもありえようが、「いま」「たったいま」といった時間規定は同じような意味で誤ったもので

ありうるだろうか。また第二に統握作用は自我のいわば能動的な作用であり、「ヘビ」等といった対象を指定する働きであるが、「いま」「たったいま」といった時間的な経過もそのような働きの所産とみなしうるだろうか。そしてそれ以前の感覚的な内容に関しては、時間的経過をまったく欠いた、いわば無時間的な諸内容が並存しているのだろうか。つまり感覚内容は、時間の外に存在することになってしまふのではないだろうか。

見られるように、ここでフッサールは、外界がもつ自然的時間と、体験自身もつ内在的な現象学的時間とを判然と区別していない。つまりここで彼は通常の時間概念しか持っておらず、外界の超越的な自然事物に属する物理的時間を遮断した後に残る、感性的諸与件の連関を秩序づけている現象学的時間がまだ語られていないのである。「二〇〇一年の九月一日」とか「三ヶ月前のあの日」「一五分前からずっと」等の規定は、外界の対象に属する時間規定である。というのもこうした規定は結局のところ、キリストの生誕や天体の運行、時計の針の位置といった外界の諸事象にもとづいて規定されるからである。しかし他方で「いま」「たったいま」といった時間規定は、そうした外界

の諸事象によっては規定されない。

この時期にこの区別がはっきりしないのは、フッサールが「超越論的還元」の着想をまだもっておらず、いまだに布伦ターノの記述的心理学の枠内を動いていることと関係がある。判断論の文脈と時間論の文脈とでフッサールは同型的な批判を行っているが、それはフッサール自身もまた、作用の「対象」と、統握される「内容」とを、見かけほどしっかり区別していないからなのである。しかしこの区別を布伦ターノが行っていないという第二の批判を通じて、フッサールは「現象学的還元」の着想に近づいていくことになる。

2 作用の対象と統握される内容とを区別していないという批判

2. 1 知覚における統握作用。一九〇四／〇五年。

フッサールが内在的な現象学的時間の存在に気づくのは一九〇四年頃であり、幾つかの時間論草稿が個々の体験契機を秩序づけている内在的な現象学的時間を提示している。例えば、「継続の知覚は知覚の継続を前提している」などと言われ、知覚対象となる自然的・物理的な時間的継続と

は別の、もろもろの体験の相互継起としての継続がより深い次元に見いだされてくるのである。

この時期、『時間講義』のもととなった一九〇四/〇五年の講義が行われるのであるが、この講義は(1)「知覚について」、(2)「注意、スペチエス思念、等々について」、(3)「想像と像意識」、(4)「時間の現象学について」の四つの部分からなる。ここではフッサールの言う統握作用について理解を深めるため、「知覚について」の講義から知覚的な統握作用についての議論を追ってみよう。

この講義では知覚作用と知覚される対象との関係、志向的關係がどのようなものであったかが問われる。知覚される対象(例えばこの「机」)に対して、幾つかの異なる知覚が可能なのであれば(例えば同じ「机」についての遠くからの知覚と近くからの知覚、前面からの知覚と背面からの知覚、等々)、そのつどの知覚そのものに属する感性的な内容(実的内容 (reeller Inhalt))ないしは端的に「内容」と、そうしたさまざまな知覚を通じて同一的な知覚対象としての内容(志向的内容 (intentionaler Inhalt))ないしは端的に「対象」とを、区別しなければならぬ。そしてこの両者の関係が「統握」である。

知覚統握においては、同じ内容がさまざまに異なって統握される場合もあれば、同じ対象が異なる内容にもついで統握される場合もあり、それゆえ統握された対象は内容の「過剰 (Überschüss)」という性格をもっている。⁽¹³⁾

またフッサールは、知覚対象の、現に知覚され呈示されている契機に関する現前化 (Präsentation) の関係と、現に呈示されていない契機に関する現前化とを区別している。例えばこの「机」について、現に見えている前面に関しては、内容が実際に「机」の前面を呈示しているので本来的な現前化であり、内容が対象に対して「類似性による現前化 (Präsentation durch Ähnlichkeit)」を行っている。これに対して、机の見えない背面に関しては、それに対応する内容をもっておらず、非本来的な現前化であるが、しかし机の見えている部分の延長上に現れることが予想されるので、「隣接性による現前化 (Präsentation durch Kontiguität)」が成立している。そしてこの二つの現前化の絡み合いが、知覚に特有の「自体現出」という性格をもたらすのである。⁽¹⁴⁾ この点で知覚統握は、多面的な観察に対して対象がすぐに自らを抹消してしまうような「幻覚 (Halluzination)」から区別される。⁽¹⁵⁾

『論理学研究』では、「統握の仕方」ないし「統握形式」の相違とは、「対象が表象される仕方が単に表意的 (signifikativ) であるか、それとも直観的であるか」(XIX/2, 624) ということだと言われているが、この違いはここで言う「現前化」の違いと同列に語られるものであろう。注意すべきことは、この相違は「知覚」と「想像」の違い(『論理学研究』ではこれも「統握形式」の違いと言われているが)、あるいは上の「幻覚」と「知覚」の違いのように画然と区別させられるようなものではなく、具体的には程度差をもつさまざまな中間段階として考えられるということである。フッサールが時間的規定の相違とは「統握の仕方」であると述べるときに、彼が本来念頭においていたのはこうした微妙な程度の差異のことであつたらう。

2. 2 『時間講義』における布伦ターノ批判

こうして「内容」と「対象」とが区別されたことに対応して、『時間講義』では対象に属する「客観的時間」、言い換えれば「世界時間」ないし「自然時間」(X, 4)と、「意識経過の内在的時間」(X, 5)とが区別されることになる。「一つの層だけに限定される時間分析は不十分であ

り、むしろ時間分析は構成のあらゆる層を探求しなければならぬ」(X, 17)。

細かく見れば『時間講義』における布伦ターノ批判はやや複雑であり、「対象」と「内容」との区別が十分に行われていない(X, 17)という批判以外にも、次のような点をフッサールは挙げている。

(a) 外的な客観の遮断が不徹底であり、それゆえ自然的時間概念が混入してしまっている(X, 16)。

(b) 「新鮮な想起」の働きは、「根源的連合」のような想像の働きではない(X, 16)。

(c) 「たったいま」の意識は非実在的なものではなく、現行的で実的な体験である(X, 19)。

これらの論点は互いにどのように関連しているのかを考えてみよう。

(a) の点に関しては上述のように、「対象」と「内容」との区別が不徹底であるという点に由来する。次に(b)に関しては、上で述べたような知覚作用の「自体現出」という性格を想像が定義上もっていないということから理解される。例えば「ベガサス」のような想像された対象の場合、知覚の場合のようにその対象が眼前にありと現

れるという性格をもっていない。それゆえ、眼前にありありと現れている事物の運動や、実際に聴かれている「メロディー」の本質的な構成要素をなす「新鮮な想起」の働きを「想像」と混同するならば、想像は対象それ自体を与える作用ではないので、事物の運動や「メロディー」についての、絶対に疑いえない明証的な知覚というものが不可能になってしまう。

結果としてブレンターノにとっては、いまの点的な瞬間にしか知覚性格が認められないことになる。実際ブレンターノにとって「たったいま」は実在性を奪う「変様させる規定」であった。そこで「たったいま」の意識は非実在的なものではない、という(c)の批判が関係してくる。

つまりフッサールにとって「たったいま」の意識は、現に体験されている疑いえない契機でなければならないのである。そうでなければ、対象的な時間経過に属する自然的時間を遮断した後に残るのは、限りなく貧困な現在の瞬間点のみとなってしまう。「意識経過の内在的時間」への還元が無意味になってしまう。こうして(c)も、疑いえない領域として確保すべき内容的なものと、実在性を疑いうる対象的なものとを混同しているという批判と同じ理由から

くるのがわかる。

このようにブレンターノが「対象」と「内容」とを混同しているという批判は、自然的な時間を遮断し、「意識経過の内在的時間」を見いだしていくことと関係していた。

それは統握作用の所産としての超越的な「対象」から、意識の中に実的に内在している疑いえない「内容」へと還帰していく歩みである。そしてこれは、一九〇七年の『現象学の理念』講義、さらには一九一三年の『イデーンI』において体系的に叙述されることになる、現象学的還元⁽¹⁶⁾の端緒となっていくのである。

まとめ

時間意識の現象学における「統握—内容」図式の破綻は、発生的現象学の構想を促すものとして、時間論に関心を持つばすべての論者が自明のものとみなしてきた。確かに、フッサール自身も結局はヒュレー的な内容的契機に関する「内在的時間」を探求することになったのであり、その意味ではブレンターノが時間的な変様を内容的契機に帰着させているというフッサールの批判は不当である。しかしそもそもこの図式の採用によって、フッサールが自然的な時

間から距離を置き、それとともにブレントラーノの経験主義的な記述的心理学から自立することができたことは、積極的に評価されるべきである。このことを見落とすならば、フッサールの晩年の超越論的な発生的現象学を発展させる試みも、単なる発生的心理学に逆行することになる。

(1) 以下『時間講義』と略記。なお以下、フッサールの引用箇所は、(フッセリアーナの巻数、ページ数)で表す。

- (2) Karl Stumpf, *Reminiscences of Franz Brentano*, trans. L. McAlister & M. Schättele (in: *The Philosophy of Franz Brentano*, ed. L. McAlister, Humanities Press, 1976), p.38. ちなみにブレントラーノのまじまじした時間論については、遺稿集 *Philosophische Untersuchungen zu Raum, Zeit und Kontinuum* があるが、この遺稿集は一九〇五年以降のものであり、直接の参考にはならない。というのもマリガンによれば、ブレントラーノの時間論には少なくとも四つの時期区分が必要だが、フッサールが依拠しているのは第一期(一八六八—七〇)あるいは第二期(一八七〇—九四)である (Kevin Mulligan, *Brentano on the Mind* (in: *The Cambridge Companion to Brentano*, ed. D. Jaquette, Cambridge University Press, 2004) p.78—79)。実際クラウスの指摘通り、フッサールのブレントラーノ

ノ批判はやや公正さを欠いており、一九二一年公刊の『経験的見地からの心理学』第二巻所収の附論のうちに、フッサールが指摘している点をブレントラーノ自身がすでに自己修正していた跡がうかがわれるが、フッサールはそれを献呈されたにもかかわらず、一九二八年の『時間講義』出版時に考慮していないという事情がある (cf. Oskar Kraus, *Toward a Phenomenology of Time Consciousness* (in: *The Philosophy of Franz Brentano*, ed. L. McAlister, Humanities Press, 1976), p.224—239)。それゆえにここでは二次文献や当時の著作の断片的な叙述から、第一期ないし第二期のブレントラーノの時間論を再構成することにした。

- (3) ちなみに立松弘孝はこれを仮に「直前的既在の感覚」と訳している。『内的時間意識の現象学』(立松弘孝訳、みずき書房、一九六七)、訳注二〇四頁。
- (4) Kraus, *ibid.*, p.230
- (5) *Descriptive Psychologie* (Hg. R. Chisholm & W. Baumgartner, Felix Meiner (PhB 349)) は、以下DPと略記する。
- (6) 本た Einleitung von Herausgeber (in: DP), S. XVI ff. (XXI 参照)。
- (7) なおフッサールが『時間講義』でブレントラーノの説を

- 紹介しながら、カントをまねて「表象された一ターラー、可能的な一ターラーはターラーであるのではなからぬ。」(X, 14)と述べているのもこの文脈においてである。例えば「…を見ること」なども「一ターラー」によって「変様を定める規定」であった。「色を見ること」は、実在する「色」に見ること」が付け加わったものであるが、色の実在性がなくとも「色を見ること」は成立している(つまり色を見つらたと同じ錯覚の場合など)からである(DP, 25f)。
- (8) 以下 *Vom Ursprung stitlicher Erkenntnis*, 1889 (unveränderter Nachdruck, Felix Meiner (PhB 56)) 及び *Psychologie vom empirischen Standpunkt, Zweiter Band*, 1911 (unveränderter Nachdruck, Felix Meiner (PhB193)) は PESS II を略記する。
- (9) この表現にはほ対応する叙述は『経験の見地からの心理学』第一巻 (PESS I, 112) に見いだされる。
- (10) これらはいずれも「統攝」の説明としてフッサール自身挙げた例である (XXXIII, 173, XIX/1, 398)。
- (11) 立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』訳注一九三頁、また Toine Kortooms, *Phenomenology of Time*, Edmund Husserl's *Analysis of Time-Consciousness* (Phaenomenologica 161, Kluwer Academic Publishers, 2002) p. 2 参照。(1)の講義「知覚について」はいまだ未公開の草

稿(フッサール・アルヒーフの草稿番号 FI 9)に属しており、以下は主として Kortooms 前掲書からの孫引きとする。なお(2)の草稿はいまのところ所在が不明であるが、(3)はフッサール第二三巻にテキスト Nr.1 (XXXIII, 1-108)として再現されている。

(12) Kortooms, *ibid.*, p.6 (FI9, 9b)。実はこの区別はすでに『論理学研究』でも見いだされる (XIX/1, 411ff)。

(13) Kortooms, *ibid.*, p.7 (FI9, 17b)。

(14) Kortooms, *ibid.*, p.8 (FI9, 29b) また一九〇七年の「物講義」(XVI, 55) にも同じく同じくこの簡単な言及がある。

(15) Kortooms, *ibid.*, p.5 (FI9, 9b)。

(16) 実際、内在的時間に於いて考察されている一九〇五年の「ゼーフエルトー時間草稿」に、フッサールはのちに「現象学的還元」の概念を正しい用法がすでに見いだされる」(X, 237)と書きつづけていることになる。

二〇〇四年七月三〇日受稿
二〇〇四年八月二〇日レフェリーの審査
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)